

昭和大学富士吉田キャンパスを見学して

——3つの観点から——

渡邊 洋子（新潟大学）

昭和大学は、医学部、歯学部、薬学部、保健医療学部（看護学科、理学療法学科、作業療法学科）からなる医系総合大学で、1学年約600人の学生が在籍している。同大学「学則」第2条では、「それぞれの専門性を基盤としつつ綿密に連携した医系総合大学の長をを活かし、高い倫理性と教養、豊かな知識と優れた技能とを兼ね備えた医療人を育成するとともに、多職種連携を促進し、日々発展する生命科学と先進的な医療を探究することにより、人類の健康と福祉に貢献すること」（下線引用者）と、「多職種連携」が同大学の教育研究の目的の一環に掲げられている。

多職種連携教育（InterProfessional Education, IPE）は、「2つ以上の専門職者が、連携・協働の質、ケアの質を向上させるために、共に学び、お互いから学びあいながら、お互いについて学ぶ機会」¹と定義される。

高度化・複雑化する医療技術の発達、患者のQOLを尊重した医療ケアの展開、高齢化・過疎化の進む中で求められる地域医療の普及などの中で、医療現場ではますます多領域・分野の専門職が協働する、多職種連携業務／協働（InterProfessional Work、以下IPW）の比重が増している。そこで求められるのは、単なる相互理解やコミュニケーションスキルの獲得に留まらず、異なる文化的背景をもつ他の専門職と「共に学び合う」教育的営みである。とはいえ、医療現場では、多忙な医療スタッフの全職種・全職員に一律に、現職教育としてIPEを実施するのは困難な状況にある。必然的に、就職後のIPWの円滑かつ効果的な遂行に向け、IPWに容易にアクセスし得るような実践的なIPEが、専門職の養成課程に導入されることとなった。

今回、訪問・見学の機会を得た昭和大学におけるIPEの取り組みは、同大関係者により、『医学教育』誌に次のように紹介されている。

1年次は山梨県富士吉田市で4学部学生が全寮制教育を行い、2年次以降は東京都品川区の旗の台キャンパスで、医・歯・薬学部と大学病院が併置された環境で学習し、各学部の学生、教員の学部間交流が日常的である。また、全国の医系大学で最大規模の附属8病院で多彩な臨床実習と各学部の学生受入れができるという特色を持つ。こうした学習環境を活かし、チーム医療の実践に必要な多様な能力の修得を目的に、様々なチーム医療学習カリキュラムを導入している²。

同大学は、2006（平成18）年以後、文部科学省の助成（「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」・「大学教育・学生支援推進事業」の「大学教育推進プログラム」）を受けつつ、全学年におよぶ学部連携教育カリキュラムを構築してきた。そこでは、低学年は「チーム医療の基盤作り」の時期、高学年は「大学内外の医療施設や地域社会での実践的なチーム医療学習」の時期とみなされており、今回、私たちが見学させていただいた富士吉田キャンパスでの教育は、「チーム医療の基盤作り」の第一段階に位置づけられるものと言える。

以下、同キャンパスの訪問・見学を通して経験し、学び得たことを、初年次教育、「違いから学ぶ」教育、実習の振り返り、の三つの観点から、振り返ってみたい。

第一は、初年次教育という観点である。現在、国

¹ 英国多職種連携教育推進センター（Centre for the Advancement of Interprofessional Education, CAIPE）による。佐伯知子「IPEをめぐる経緯と現状、課題」『京大大学生涯教育フィールド研究』Vol.2（通関13号）、2014年、13頁（9-19頁）を参照。

² 木内祐二・倉田なおみ・高木康・高宮有介・馬谷原光織・片岡竜太・下司映一・鈴木久義・田中一正・倉田知光「特集 多職種連携教育 II—4 昭和大学の体系的、段階的なチーム医療教育カリキュラム」『医学教育』2014, 45（3）: 163-171。

内で普及する初年次教育とはすなわち、大学入学以後の1年間程度の間、大学という学習環境や大学の学習への適応、必要とされる学修スキルの獲得などを目指して実施される、教育的取り組みの総称とも言える（詳しくは、渡邊「初年次教育における『異質』『多様性』要素の教育的意義」、本誌4-12頁を参照）。

近年、医療系大学においては、IPEに力を入れる大学が増えてきている。その中で、昭和大学が特徴的なのは、IPEを一教科や一実習の範囲にとどまらず、「6年間にわたって、体系的、段階的に学習の場と内容を広げ、確実にチーム医療に必要な能力を修得する学習」として正規カリキュラムの中に位置づけている点である。

すなわち、同大学は6年間を通じて「体系的」「段階的」に、多職種連携の体験的理解の機会を学生に提供している点が特筆される。各学部の1年生は、入学式直後という受験生活から大学生活への過渡的時期を起点に、寮生活というインフォーマルなIPE空間に入ることを求められる。初年次におけるIPEは、複数専攻の学生が混在する4人部屋の生活場面とIPE基盤型の講義・実習の学習面という、連続性のあるIP空間とIPコミュニティにおいて展開されている。このような日々の共同生活を通じた自他の専門職領域の体験的理解こそが、IPEの一方の講義や一過性の演習では得られないような、円滑かつ効果的なIPWに向けたIPEの基盤を形成するものと考えられる。

晴天であれば雄大な富士山を日々見上げることのできる、ゆたかな自然環境の中で、寮生活と授業・実習が連動したIPE空間で過ごすという初年次の経験は、大学教育への適応を目指して「態度」「スキル」を教え込む近年の「初年次教育」の動向とは一線を画した、独特の教育空間を形成している。

第二の観点は、「違いから学ぶ」という教育である。すなわち、自分の領域の独自性（強み・弱み）を知り、「他との違いから学ぶ」ことの教育的意義である。そこでは、学生自身が、自他の専門職性や専門職文化の「違い」に気づくことを通して、将来の自らの専門職性の意義と特性を自覚することが、重要な教育的意味をもっていると考えられる（詳しくは、前出渡邊原稿を参照）。

富士吉田キャンパスで私たちは、IP混合チームで課題基盤型学習（PBL）を行うためのPBL室が並ぶ棟と施設、およびそこでの一部の学生チームの話し

合いの様子を、窓越しに見学した。また別の棟では、混合チームでのシミュレーション機器を用いた演習授業を参観させていただいた。この授業は、人工呼吸と蘇生に関わるもので、学生たちは10グループほどのIPチームに分かれ、学部の違いにこだわることなく、分け隔てなく協力し合い、声をかけ合って活動に取り組んでいた。担当教員が各々のチームに寄り添って活動を観察し、必要に応じて指導・助言を与えていた。このような雰囲気の中で、学生同士が各々学び始めた専門的知識や情報を出し合い重ね合わせながら、徐々に互いの背景の違いを理解していくであろうことが推察された。そして、その「違い」への注目こそが、自らの領域のもつ特色や強み・弱みの気づきにつながるのではないかと思われた。

このような経験は、日々の寮生活において、より頻繁かつ身近なものとなっているだろう。男女別の寮では、主に「医・歯・薬・看護・理学／作業療法」から1人ずつ、計4人の学生が、一つの部屋でともに生活することで、寮生活が成り立っている。共有空間も備えた男性寮の一部を見せていただいたが、部屋のドアに、複数分野の学生の名札が並ぶ光景には、興味深いものがあつた。ただ一年時はまだ専門的学修が少ない。それゆえにこそ、互いの「同じ」部分を享受・共有することが容易になり、また二年時以降の協働に向けた素地を形成することが可能になるのだろう。

訪問当日はさらに、実習に出かけたIP混合チームの、夕刻のキャンパスへの帰還風景をも見学することができた。実習中は、同じチームの中でも、専門ごとに実習内容やその重点が若干異なり、ゆえに着眼点や行動などにも各々の特色がみられるという。「違い」の自覚は、医療現場の各場面において、より顕著に意識されるであろうと思われた。

第三の観点は、実習の振り返りの方法である。上述のように、私たちは夕刻、マイクロバスやタクシーなどで実習から続々と帰還する学生たちと各チームを担当する教員が校門周辺で落ち合い、あちこちで輪になって、立ったまま早速、同日の実習内容の振り返りを始める風景に遭遇した。先生方のフットワーク、学生に安心感を与える送迎姿勢、要領を押さえた実習報告の聴取、必要事項の確認、指導助言、労いや励ましの言葉がけなどが、間近で捉えられた。学生たちがきちんと実習を振り返り、緊張感と疲労から安堵や笑顔へ、そして明日への意欲を見

せるところまで見届けて解散となり、学生たちはほっとした表情で帰途についていた。談笑する学生たちが通り過ぎていく、おだやかな光景であった。

一般に、実習の振り返りとその指導は、日々の実習終了後の日誌・日報の記入と、すべての実習日程が終わってからの、教員の総括的な指導という形で行われることが多い。これは、Donald Schön (1930 - 97)³の提起した二つの振り返りのうち、‘Reflection on Action’に相当するものと言えよう。‘Reflection on Action’とはすなわち、実践終了後に、全体報告の作成などを通して行われる振り返りを指している。

これに対し Schön はまた、実践期間中において「次の実践」にすぐに適用できるような、直後（最中）の振り返りを ‘Reflection in Action’ と呼んでいる。私たちが現地で目の当たりにしたのは、まさに、この ‘Reflection in Action’ であった。通常、実習生が自宅に戻るまでは「実習中」と捉えられ、振り返りを求められることはない。だがむしろ、まだ実習生の中に、現場の状況や場面のリアリティと記憶（心理的継続性）が生々しく、心身の疲れと何らかの「できごと」に関わる気がかり、気持ちの動揺や葛藤などが残っているその日のうちの振り返りは、まったく違った効果やリスク回避の可能性を生むであろう。実習生本人が、指導者とともに現場や場面の文脈に沿った丁寧な振り返りを行い、適切な対応や指導助言、必要な軌道修正などを受けておくことは、喫緊の問題解決や実習生の精神的安定につながるのみならず、それが実践的な現場であるほど、「次」につながる重要な対応になると言えよう。

以上、富士吉田キャンパスの訪問・見学で触れることのできた IPE 教育の実践について、簡単ではあるが、三つの観点から改めて振り返ってみた。筆者らが担当する創生学部は、昭和大学各学部のようなキャリア直結型学部ではない。とはいえ、このような非キャリア直結型学部の学生たちにおいても、将来、自分の目指したい方向性、自らの人生の将来的な設計図や見通し、5年後・10年後に「自分がこのように働いていたい」「このように生活していきたい」「このように人と関わっていたい」などの自己イメージ、などを明確にできる機会を設けることは、同

じように教育的に重要な意味をもつものと考ええる。

今後、このような非キャリア直結学部における初年次教育のあり方を模索する上で、今回の昭和大学富士吉田キャンパスの訪問・見学は、多くの示唆や手がかりを与えてくれるものであった。このような経験を活かしつつ、また他の多くの先行事例を批判的に検討しつつ、非キャリア直結学部における独自の初年次教育の価値と方向性、および可能性を模索し続けていきたい。

謝辞：このような機会を与えてくださった倉田知光教授をはじめとする同キャンパスの教職員の皆様、そして学生の皆さんに、感謝の意を記したい。ありがとうございました。

なお、本実践研究は、JSPS 科研費 17K18628 の助成を受けたものです。

³ MIT 教授、省察的实践・組織的学習の提唱者。主著は、ドナルド・ショーン（柳沢昌一・三輪建二監訳）『省察的实践とは何か

ープロフェッショナルの行動と思考』、鳳書房、2007（*The Reflective Practitioner: How professionals think in action*. London: Temple Smith, 1983.）。